

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

NEWS

4

APRIL 2025
#1019

赤十字NEWS
WEB版はコチラ



特集 ▶ P.2

ウクライナ人道危機の3年

紛争の中でも、生きる力を



Present!

玉川衛材株式会社

『フェミルテ
デリケートふきとりフォーム』+
『フィッティ
シルキータッチ耳ゴムふわり
30枚 ホワイト ふつうサイズ』

セットで
10名様
詳しくはP.7を
Check! ▶



CONTENTS

TOPICS

[大阪・関西万博]5月4日~10日「赤十字ウィーク」
「災害への備え」を見る・知る・感じる1週間 P.4

大船渡市の林野火災
日赤の活動報告 P.5

連載

LIVE 万博パビリオン P.4
けんけつのいま P.5

AREA NEWS

[山形] 「献血動機」をキャラクター化
地元芸大生とのトークショー

[香川] 血液の出庫から納品まで
中学生が職業体験

[山口] 子どもと一緒に楽しく防災!
親子防災教室開催 /他 P.6

WORLD NEWS

台湾地震から1年
日本と台湾、深まる絆 P.8

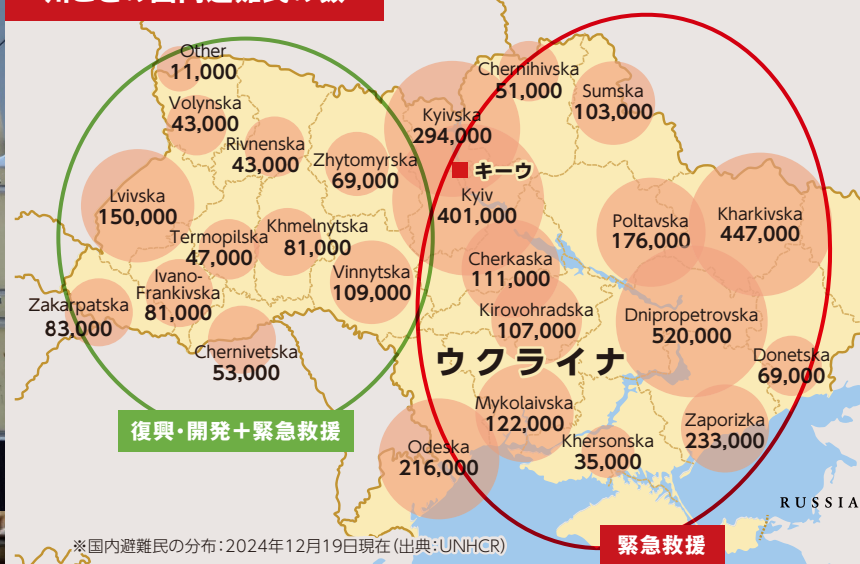
SPECIAL FEATURE

ウクライナ人道危機の3年

紛争の中でも、生きる力を

赤十字の支援とその変化

2022年2月以降に激化したロシア・ウクライナの国際的武力紛争から3年が経過しました。ウクライナでは、現在も1000万人以上の人々が国内外への避難を余儀なくされ、各地で医療施設やインフラの被害も報告されています。今回は、多くの人々が人道支援を必要とする中で、赤十字がこれまで行ってきた支援を振り返るとともに、支援を受けた方の声やウクライナで活動する赤十字スタッフの声もお届けします。

ウクライナにおける
州ごとの国内避難民の数

支援の変化

現在継続中の支援
【保健医療分野】
巡回診療、リハビリテーションセンター運営、訪問リハビリの支援
【社会福祉分野】
コミュニティセンター、在宅ケアの支援
【緊急救援分野/その他】
緊急車、現金給付、緊急対応基金の支援、厳冬期対策(暖房器具などの配布)など

ニーズが拡大する訪問リハビリ(MRU)
①理学療法士(以下PT)、理学療法士アシスタント(以下PTA)、ドライバーを1チームとし、各州2チームにて稼働。受益者宅でリハビリを提供
②身体だけでなく、心理的サポートも実施
③必要に応じて、義肢や生活器具も提供
④地域のリハビリスペースでのリハビリ提供
⑤地域の人々に向けたリハビリの普及活動

日赤理学療法士による支援
①MRUを提供する支部(リヴィウ、イヴァノ＝フランクィウスク州)におけるPT/PTAへのトレーニング
②MRUチーム(リヴィウ、イヴァノ＝フランクィウスク州)との同行訪問によるPT/PTAへのJT(On the Job Training)支援
③ウクライナ赤本社のPTへの支援、地域住民に対するリハビリプログラムの提案・作成・実習

**ウクライナ人道危機から3年
赤十字の活動報告会【動画】**

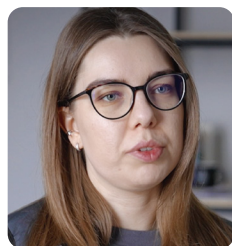
専門家と語る現地情勢と支援ニーズの変化、避難民の声を紹介しています。

詳しくは >

| 現地のニーズに合わせた赤十字の支援

ウクライナで紛争が激化した直後から、ウクライナ赤十字社(以下、ウクライナ赤)は、日赤を含む国際赤十字の資金・物資・技術面の援助を受け、避難支援や保健医療支援、居住支援などを行ってきました。

ウクライナ国内で最大の人道支援団体であるウクライナ赤は、全ての州(24州)に支部があり、合計1万3000人以上の職員・ボランティアが地域ごとに異なるニーズに応え、草の根の活動を展開しています。その中でも特徴的な活動の一つが「**国内避難民を受け入れるホストファミリーへの現金給付支援**」です。避難が長期化する中で、経済的にも困窮する避難民を無償で家に住ませる世帯が数多く存在していることから、水道光熱費・食費などホストファミリーの負担を軽減するための施策で、現在、その対象となるホストファミリー数は10万世帯に及びます。また、ウクライナ東部は緊急救援のニーズが依然として高く、人々を避難させたり、必要な物資を配布したりといった赤十字の支援が続いています。中部・西部においても、連日のように空襲警報が発令され、そのたびにシェルターに避難したり、インフラへの攻撃によって電力不足に悩まされたりと、心休まることのない状況が続く中、復興や生計支援、就職のためのサポートなど、形を変えながら、真に求められる支援を行っています(2025年2月時点)。これらの活動に、皆さまから日赤に寄せられた海外救援金が活用されています。



支援者

ウクライナ赤十字社
現金給付支援担当
オレナさん

支援者

ホストファミリー
マヤさん

ウクライナ赤十字社と

避難民の「声」

避難民受け入れを現金給付でサポート

ウクライナ赤は政府と協力しながら、現金給付支援を行っています。これは、無償で国内避難民を受け入れ、保護している人々、住宅の提供者に手当を支給するもので、国際赤十字を通じて世界から集まった寄付がこの活動に生かされています。避難を余儀なくされる人はもちろん、受け入れる側も困難な状況にある中で、極めて重要な支援です。私たちを支援してくれる日本の人々に感謝しています。

避難する人々が少しでも
安心して暮らせる環境を

今はアパートを借りるにも家賃などが高いので、避難してきても住む場所を見つけることは困難です。だから私は、避難民を自宅に受け入れています。私たちは、もはや一つの家族。毎日一緒に料理をし、共に誕生日などを祝い、悲しみも分かち合います。この幸せな生活ができるのも、赤十字の資金援助のおかげです。



受益者

イルビンの
国内避難民
イリナさん

受益者

バフムートからの
国内避難民
マリーヤさん

無償で避難生活を送れるのは支援のおかげ

私は首都キーウの郊外にあるイルビンで避難生活をしています。もともとイルビンに住んでいて、紛争が激化して別の場所に逃げましたが、住み慣れた家が焼け落ちる映像をテレグラム(チャットアプリ)で見ても立ってもいられず、帰る場所はないと分かっているにも戻ってきました。今はホストファミリーの家で暮らしていますが、彼らは私たちからお金を受け取りません。そんなホストファミリーに現金給付の支援があり、本当にありがたいです。

家族のようなホストファミリーが心の支えに

紛争が続くドネツク州のバフムートから、着の身着のまま逃れてきました。縁もゆかりもない私たちを受け入れてくれ、靴も服も、必要なものを全て提供してくれるホストファミリーのマヤさんには、心から感謝しています。避難して2年半以上になりますが、マヤさんや、共に避難生活を送る仲間は家族のような存在です。マヤさんと私たちの生活を支えてくれる資金援助にも感謝しています。

日赤による支援



写真中央が平野さん

武蔵野赤十字病院 ひらの きょうこ 平野 亨子さん

2022年の紛争激化以前からリハビリテーションの分野で能力強化が課題だったウクライナ。そこに今回の紛争が起き、身体障害者として登録された人は30万人増え、現在では約300万人がリハビリを必要とする事態に。日赤ではこれを受け、ウクライナ赤が行うリハビリテーション事業の支援を開始しました。現地で技術支援を行った理学療法士・平野亨子さんが、その活動を報告します。

| 理学療法士を派遣、リハビリの技術支援は日赤だけ

2024年8月から11月にかけて、ウクライナのリヴィウ州とイヴァノ＝フランクィウスク州に赴き、現地の理学療法士や訪問リハビリチームのスタッフに、専門器具の使用方法や、患者の日常生活における動作を介助する方法などの技術指導を行いました。現地での活動で印象に残っているのは、ほぼ寝たきりで、会話でのコミュニケーションが困難だったアナさんの事例です。彼女は、訪問リハビリを受けるようになり、単語を用いたコミュニケーションが取れるまでに回復しました。笑顔で過ごす時間も増え、単語レベルで言葉を交わして、お互いの気持ちが伝わったとき、ご家族を含め皆が感激しました。この一連の活動の中で、患者さんのために必死に知識や技術を学ぼうとする現地スタッフの姿にも心を打たれました。

日本では当たり前のように手に入る歩行補助具も、ウクライナでは在庫を確保できないことも多くあります。人材の確保にも、物的資源にも制限があるため、障害のレベルが軽い患者さんに対しては家族やボランティアでもリハビリが行えるように、プログラムの作成も必要でした。また、スタッフが交代しても同じ介助ができるように、知識と技術を学べる教材を作ることで、技術の伝承も可能になりました。

ウクライナには、カナダ、イタリア、ドイツなど各国の赤十字社も医療支援に入っていますが、理学療法士による技術的なサポートを行っているのは日赤だけ。日赤の医療面での支援力を生かして、これからも、サポートを継続していきたいと思っています。

世界が定めた
保護のルール

「赤十字標章」



紛争地において赤十字は、負傷者を保護・搬送し、生きるために必要な物資を届け、完全に中立な立場で、敵味方の区別なく傷ついた人を救う活動を続けています。

攻撃が続く前線であっても、この活動ができるのは、紛争時の民間人の保護を定めた「ジュネーブ諸条約(国連の加盟国よりも多い196カ国が締結)」で赤十字のマーク(標章)を攻撃の対象にしてはならないと定められているから。そのため、紛争地やその周辺で活動する赤十字スタッフは**どこから見ても赤十字と分かるように標章を掲げ、移動の車は「防弾ガラス」無し、スタッフも「防弾チョッキ」を着ません**。赤十字標章は、極めて厳密にルールが定められているマークだからこそ、濫用を防ぐため、関係のない組織や物に使われることが禁止されているのです。

T P I C S

1
TOPICS

大阪・関西万博 5月4日～10日「赤十字ウィーク」

「災害への備え」を見る・知る・感じる1週間

5月8日は「世界赤十字・赤新月デー」。災害・紛争などさまざまな現場で人道の実現のために尽力している赤十字の活動を称える国際記念日です。万博でも、5月4日～10日の1週間は「国際赤十字・赤新月運動イベント期間(通称:赤十字ウィーク)」とし、リアルとバーチャルそれぞれで特別プログラムが実施されます。今回は、その内容を少しだけご紹介します。

会場：ギャラリー WEST

イベント初日・最終日の実施
内容と時間は、開催直前に
WEBサイト「Visitors」を
ご確認ください



ウクライナ避難民の「こころのケア」としてパロを活用

リアルプログラム ① ギネス認定の癒やしロボット「パロ」体験

アザラシ型の愛らしい姿で人の声に反応する機能を備え、「こころのケア」への活用が期待されているロボット「パロ」。世界各地で活躍し、人を癒やした数でギネスに認定されています。日本でも、昨年の**能登半島地震の被災地にある6カ所の高齢者施設で、パロによる「こころのケア」が始まっています。**(産業技術総合研究所・提供)

リアルプログラム ② キズ・ヤケド痕などをカバーする「リハビリメイク」実演

キズやヤケドの痕などをカバーし、外見を整えることで心を癒やし、社会に踏み出すことを後押しする「リハビリメイク」。かづきいこさんは、イギリス赤十字社のカモフラージュメイク(キズを自然に隠すメイク)の活動を視察したのがきっかけで、リハビリメイクを考案されたそうです。**東日本大震災の被災地などでメイクアップのボランティアを通じ、「こころのケア」**をしてきた、かづきさん。会場でご本人が実演されます。



被災地でメイクのボランティアをするかづきさん

リアル&バーチャルプログラム

万博公式のスペシャルデーにはリアルとバーチャルでライブ演奏&特別講演を開催

赤十字を創設したアンリー・デュナンの誕生日でもある5月8日の「世界赤十字・赤新月デー」には、**阪神淡路大震災を経験し、歌の力で心の復興に取り組んだ臼井真さん***の講演を赤十字語学奉仕団が同時通訳し、**ライブで配信**。また、全国トップクラスのバンドである早稲田大阪高等学校(青少年赤十字加盟校)の「ウィンドバンド」による吹奏楽演奏など、赤十字活動の仲間たちが万博会場から世界へ向けてメッセージを発信。このイベントの様子は大阪・関西万博バーチャル会場でも視聴可能です。

※1995年の震災当時、神戸市立吾妻小学校の音楽教師であった臼井さんは「しあわせ運べるように」を作詞・作曲し、被災地の人々の心の支えとなりました

万博パビリオン

万博の
今を発信!

このコーナーでは「国際赤十字・赤新月運動館(通称:赤十字パビリオン)」など万博会場のリアルな様子を現地からレポートしていきます。



©Expo 2025

見知らぬ誰かと「思い」が重なる「メッセージウォール」

赤十字パビリオンは、入り口から進むごとに気づきが深まる3つのZONEで構成されています。特に、最後のZONE3は、万博会場にいる人もWEBからアクセスしている人も、バーチャル空間で**“人道危機に対する思い”を投稿できる「メッセージウォール」がポイント**。縦3.5m×横8mのウォール上で、遠ざかったり近づいたりしながらゆったりと飛び交うメッセージボールを見て、「気づき」が生まれる体験もできそうです。

特設WEBサイト



特設WEBサイト内で公開される、メッセージ投稿画面のイメージ



ウォールにメッセージを送ることができる投稿台が4台あり、キーボード・手書きいずれかの入力方式を選ぶことができる

「メッセージウォール」の
投稿画面は特設WEB
サイトで4月から公開



2
TOPICS

大船渡市の林野火災

日赤の活動報告



2025年2月26日に岩手県大船渡市で発生した林野火災により、同市赤崎町合足地区や三陸町綾里の広い範囲が焼失しました。日赤は、発災当日に日赤岩手県支部から大船渡市役所へ、毛布700枚、バスタオル700枚、緊急セット150個、安眠セット420個をお届けするなど、支部職員と防災ボランティアが現地で活動を開始しました。同月28日には盛岡赤十字病院と石巻赤十字

病院からそれぞれ医療救護班1班を派遣し、ICAT(いわて感染制御支援チーム)と連携して、避難所を巡回してニーズの調査、健康相談を行いました。延焼拡大とともに避難者数が増え、また、車中泊をする避難者も多かったため、エコノミークラス症候群(静脈血栓塞栓症)の予防にも気を配りました。また、3月2日から3日にかけては、ダンボールベッド81個、パーテーション200個、屋内用テント140個、毛布300枚、安眠セット504個、タオルケット1100枚を大船渡市民体育館へ追加でお届けしました。4日からは、こころのケア班(岩手県支部、宮城県支部、秋田県支部)を順次派遣し、**避難所の巡回、地元の赤十字奉仕団と協力した避難所の衛生環境改善、被災者の不安や悩みを聞き、精神面でも寄り添う活動を実施しました。**上記活動の他、大船渡市、花巻市、釜石市の地域赤十字奉仕団が合同で避難所での炊き出しを行い、温かい食事をお届けしました。

3月10日に避難指示は全て解除されていますが、210棟に及ぶ建物への被害があるため、引き続き被災された方々に寄り添った活動を実施していきます。



活動資金

日赤の活動は皆さまからのご寄付に
支えられています

災害時の被災者救護や「こころのケア」活動、
防災・減災の普及啓発など、
活動資金へのご協力をお願いいたします。
(義援金は日赤の活動に使用されません)

詳しくはこちら



義援金

「令和7年大船渡市赤崎町
林野火災義援金」受け付け中
**その全額を被災地の
義援金配分委員会に
お送りします。**

詳しくはこちら



けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。 vol.1

このコーナーでは、献血を推進するために各地で行われているさまざまな取り組みを紹介していきます。



真剣勝負！高校生の放送コンテストは力作揃い



ラジオ局のブースで収録する望月さん

千葉県赤十字血液センターでは、令和5年度から「千葉県高文連*放送コンテスト」に共催しています。毎年3・4月に地元ラジオ局BAYFM78で献血のラジオCMを放送しており、若手職員を中心に原稿作成と収録を行ってきました。しかし、県内の10～30代の献血者数が10年前と比べ約25.8%も減少していることから、「**もっと高校生に献血について考えてもらう機会をつくりたい**」と思い、高文連

放送専門部会の協力を得て、献血啓発の音声作品を募集する特設部門の開設が実現しました。

昨年11月17日に開催された令和6年度のコンテストには、県内13校の放送部・放送委員会が参加。目覚まし時計や鳥のさえずりなど、効果音を巧みに使って朝の情景を描きだした県立柏南高校や、「けんけつ」の言葉を分解して最後には青春感のある“意外なオチ”をつけた成田高校など、**力作が揃いました。優秀賞は千葉日本大学第一高校が受賞。BAYFM78でのCM原稿作成、収録にも参加し、ナレーションを担当した同校2年生の望月玲那さんが、「あなたの一歩で命が繋がる。人は人でしか救えない」と力強い声で訴えました。**収録後、望月さんは「『血液の代わりになるものは今の医療でも見つからない、だから絶え間ない献血が必要だ』という顧問の先生の言葉が忘れられず、献血に関心がない人や躊躇して

いる人の背中を押せる作品を作りたかった」と感想を語りました。

放送コンテスト作品は県内6カ所の献血ルームの広報用音声などに活用し、高校生の声を通して献血の呼びかけを行っています。

*高等学校文化連盟



放送コンテスト「赤十字特設部門」参加校の生徒たち

高校生のみずみずしいコンテスト作品は、
右の二次元コードのリンクから視聴可能です



全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。



「献血動機」をキャラクター化 地元芸大生とのトークショー



山形県赤十字血液センターでは、2月7日に東北芸術工科大学卒業制作展で、献血をテーマにトークショーを開催しました。登壇した同校4年の大町萌々子さんは、卒業制作「わたしとけんけつ時間」で最優秀賞を受賞。献血会場での調査を通じて、献血動機が多様であることを実感し、「献血動機のキャラ化」を発案。自ら



デザインしたコレクションカードを制作しました。トークショーでは、参加者から「私もカードのキャラと同じでアイスを食べられるのが動機」と共感の声があがるなど、さまざまな意見交換が行われました。



血液の出庫から納品まで 中学生が職業体験



香川県赤十字血液センターが実施している学生向けの職場体験学習に、県内の中学校4校から13人が参加しました。これは、血液が患者さんに届くまでにどれだけ多くの人に関わっているかを体験してもらい、献血の重要性への理解を深めるために、以前から行っている取り組みです。学生たちは、血液製剤の保管庫の見学だけでなく、高松赤十字病院と協力し、発注から出庫作業、専用輸送容器への梱包、医療機関への納品までの一連の流れを体験。学習終了後、参加者からは、「システムを使って実際に血液を発注したことが印象に残った」「病院に直接血液を届けたことに感動した」などの感想が寄せられました。



子どもと一緒に楽しく防災！ 親子防災教室開催



日赤山口県支部では、3月1日に「Action! 防災・減災プロジェクト」の一環として、県内の親子を対象に防災教室を開催しました。当日は、11組30人の親子連れが参加し、防災に関する知識やスキルを楽しみながら学びました。クイズやゲームを通して地震や大雨などの災害について学んだほか、非常食の試食や、三角巾を使った応急処置体験なども。参加した子どもたちからは、「地震のときにどうすればよいか分かった」「非常食がおいしかった」といった感想が聞かれました。また、保護者からも、「子どもと一緒に防災について学べてよかった」などの声が寄せられました。



避難所でも、元気が出る温かい食事を食べてほしい 「要配慮者」向け炊き出しレシピを開発



災害発生時、被災者の健康を守るための食事は重要です。しかし、高齢者や体が弱っている方は、避難所で配られる冷たく硬い非常食が喉を通らないことも…。このような災害時に役立つよう、日赤茨城県支部は、常磐大学と連携し、10品の炊き出しレシピを開発しました。このレシピは、高齢者や障害者、乳幼児など、災害時に特に配慮が必要な方向けのもので、炊き出し袋のみで調理ができ、栄養バランスや



アレルギーへの配慮もされているのが特徴です。1月15日には、同支部で披露会も開催。支部長や常磐大学長、赤十字奉仕団や社会福祉協議会などの関係者約40人が参加する中、開発に携わった学生10人がレシピを説明しました。「お蕎麦じゃが」については、「乳幼児から高齢者まで食べやすく、災害時に不足しがちな野菜やたんぱく質を摂取できるよう工夫しました」と開発ポイントを説明。メニューは他に、トマトカレー、干し芋ご飯、高野豆腐の卵とじ、茶碗蒸し、乾パンスイーツポテト、干し芋とドライフルーツ、蒸しパンなど。レシピは、同支部ホームページで公開しています。



日赤創立150周年に向けて「Road to 150」テレビCM公開！



上白石萌音さんと共に日赤創立のきっかけとなった1867年のパリ万博から歴史を辿る

日本赤十字社は、2年後の2027年に創立150周年を迎えます。150年にわたり、社会から「救うこと」を託されてきた日赤の活動を振り返り、職員、赤十字ボランティアが一丸となって新たな一歩を踏み出す、その決意表明ともいうべきテレビCMが、4月から公開されます。動画では、アンバサダーの上白石萌音さんのナビゲートによって、日赤創設者・佐野常民が赤十字に出会った1867年のパリ万博から、さまざまな人道危機に直面しながら歩み続けたこれまでの足跡が、歴史的な記録写真・映像とともに紹介されます。これまでの歩みを1本に凝縮したこの動画は、地上波のテレビCMをはじめとする媒体で放送する予定です。



150周年を記念して、ロゴマークを作成しました。人と人が手をとりあい、互いに協力しあい、人道の輪が幾重にも重なり未来に向かって広がっていく、人間の無限の力と、大きく開く平和の花をイメージしています。



「暮らし」から幸せな社会づくりに貢献したい



防災セミナーで、赤十字救急法の手当ても実践

玉川衛材株式会社は、1899(明治32)年創業、昨年10月に創業125周年を迎えた老舗の衛生材料加工メーカーです。市民の暮らしに欠かせない医薬品・医療用品・衛生雑貨の企画・製造を手掛ける一方で、社業で社会に貢献するべく、日本全国の自治体へ自社製品マスクの寄付や、能登半島地震被災地へ「フェミルテデリケートふきとりフォーム・ふきとりシート」の寄付を行ったほか、病氣とたたかう子どもたちを支援する「そらぶちキッズキャンプ」にも寄付しています。

「予防・衛生」分野で、健康で幸せな社会づくりを応援する企業として、紛争・災害・病氣などで苦しむ人を救う日赤を支援し、1988年から日赤の活動資金への寄付を継続、今後の災害に対する備えとして、日赤東京都支部から講師を迎えて全社で防災セミナーを実施、AEDの使い方や応急処置方法を全職員が学んでいます。



フェミルテ
デリケートふきとりフォーム
デリケートなお肌の汚れをやべたつき、においの元をスッカリ落とすふきとりフォーム



フィッティ
シルキータッチ耳ゴムふわり30枚 ホワイト ふつうサイズ
元側のシルクのような肌触りのなめらかな素材により、心地よい着け心地を実現したマスク

セットで
10名様

常任理事会開催報告

令和7年2月28日、令和6年度第10回の常任理事会が開催されました。その結果は下記のとおりです。

記

- 1 理事会に付議する事項について
(1)不動産の処分について ア 松山赤十字病院
- 2 理事会及び第105回代議員会に付議する事項について
(1)役員の選出 (2)令和7年度事業計画 (3)令和7年度収支予算

審議の結果、上記1については原案のとおり理事会に、上記2については原案のとおり理事会及び第105回代議員会に、それぞれ付議することが了承されました。

また、秋田赤十字病院附属あきた健康管理センターの廃止、神戸赤十字病院及び小野田赤十字病院の地域医療連携推進法人への参加について、それぞれ報告しました。

令和7年3月18日、令和6年度第11回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、国際会議等の報告及び社内への展開について審議し、令和7年度の広報戦略について報告しました。

理事会開催報告

令和7年3月19日、全国社会福祉協議会会議室(新霞が関ビル)において令和6年度第3回の理事会が開催されました。審議結果は下記のとおりです。

記

- 1 不動産の処分について (松山赤十字病院)
 - 2 第105回代議員会に付議する事項について (役員の選出、令和7年度事業計画、令和7年度収支予算)
- 審議の結果、原案のとおり第105回代議員会に付議することが了承されました。
- また、常任理事会の理事の互選が行われ、長有紀枝、岩沙弘道、板東久美子、南砂、飯間香保子、萩原博、松岡美江子、坂口康一、浅津知子、森博幸の各氏が選出されました。なお、業務執行理事については、飯嶋喜史、渡部洋一の各氏が指名されました。
- また、最近の国際活動と病院ERU展開訓練の実施について報告しました。

代議員会審議結果公告

令和7年3月19日、全社協・瀬尾ホール(新霞が関ビル)において開催した第105回代議員会における審議結果は下記のとおりです。

令和7年4月1日
日本赤十字社

記

- 第1号議案 役員の選出について
理事29名が次のとおり選出されました。
- 理事 長有紀枝 岩沙弘道 板東久美子 南砂 飯嶋喜史 渡部洋一 堀乙彦 木明昭一郎 齊藤洋美 清野伸昭 飯間香保子 石崎金市 朝日重剛 清川忠 堀内光一郎 松岡美江子 澤田清一 大久保博幸 尾田一壽 徳田文範 川島周 小椋史香 豊馬誠 杉原正晴 田代知代 森博幸 上間優 萩原博 浅井隆彦

第2号議案 令和7年度事業計画について
原案のとおり議決されました。

第3号議案 令和7年度収支予算について
原案のとおり議決されました。

令和7年度
予算について
詳しくは



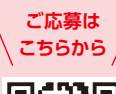
赤十字NEWSオンライン版はコチラ

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください！



プレゼント希望者は右の2次元コード
からご応募ください。
応募締め切り：4月30日(水)

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって
代えさせていただきます





台湾ってどんなところ?

国土面積は九州よりやや小さく、人口約2342万人が暮らす台湾。2011年の東日本大震災の際には200億円を超える義援金を送るなど、日本との友好も深い。東部の花蓮県は、昨年4月の大地震により甚大な被害を受け、国内でも有数の景勝地・太魯閣渓谷も、落石や土砂崩れなどの危険からいまだ一部で規制が続いている。

台湾地震から1年 日本と台湾、深まる絆

2024年4月3日に発生した台湾東部沖地震から1年。行政が中心となり積極的な復興活動が進められる中、台湾赤十字組織も、被災者支援や防災強化など、さまざまな側面から支援活動を行っています。今回はその活動報告と、日本と台湾、双方の「助け合い」により深まる協力関係をレポートします。



大地震に追い打ちをかけた台風被害によって、多くの被災者が苦境に

台湾東部沖で発生したマグニチュード7.4の地震により、18人が犠牲となり、1100人以上の人々が負傷。花蓮県市街地では、450棟以上の建物が損壊し、1900世帯以上の家屋が全半壊する被害となりました。復興に向けて立ち上がろうとする中、7月から10月にかけて、4度も台風被害が発生。複数の方が命を落とし、1万人以上が一時避難を余儀なくされ、被災者はさらなる苦境に立たされました。

日赤では、地震発災直後から台湾への海外救援金受け付けを開始し、**28億9800万円以上の寄付が集まりました**。台湾赤十字組織(以下、台湾赤)のさまざまな復興支援活動に、この寄付が生かされています。

台湾赤は、地震発生直後から赤十字ボランティアが中心となって、消防の救助隊と協力して負傷者や行方不明者の捜索・救助、避難誘導などを行ってきましたが、現在は早期復興のための支援のフェーズに入っています。深刻な被害を受けた610世帯に3万台湾元*分の家財引換券を支給したほか、中程度の被害を受けた約1000世帯には、1万5000台湾元の修繕補助金を支給。また、12月には、災害によって厳しい経済状況に陥った世帯などに1500個の食料品セットを届ける、緊急救援と栄養支援プログラムを実施しました。

また、地震によって学業の継続が困難になったり、厳しい状況となった学生たちに向けては、台湾赤が花蓮県の高校生、専門学校生、小・中学生を対象とした経済支援プログラムを実施。2024年12月現在で、39校900

人の生徒が補助金を受け取りました。

そして、地震により心理的な傷を受けた子どもたちへは、台湾赤が、貧困や困難な家族環境に置かれた児童への支援活動を行う団体と共に「クリスマス感謝祭」を共催。約150人の子どもたちがクリスマスの料理とプレゼントのおもてなしを受け、会場は笑顔であふれました。

*台湾元=1元は日本円で約4.5円(2025年3月7日時点)



災害対応力と防災意識を高める研修と教育にも注力

台湾赤では、ボランティアやスタッフの緊急対応スキルを向上させるため、2024年12月から2025年1月にかけて、**EMT-1(救急救命)訓練を実施**。この訓練の目的は、**被災者の生存率を左右すると言われる災害発生後の72時間**、いわゆるゴールデンタイムに、**迅速かつ効果的に捜索・救助するスキルを習得すること**。参加者たちは理論的な知識を学ぶだけでなく、実践を通じてスキルを磨き、複雑な状況下で生存率を向上させ、長期的な障害のリスクを軽減するための能力を高めました。

また、台湾赤は今年1月、高校生や大学生を対象に、防災スキルや災害対応の知識を学ぶための「防災リーダー養成キャンプ」も開催し、9校21人の学生が参加。その後、花蓮市玉里小学校で開催された小学生向け防災キャンプでは、前述の養成キャンプを修了した学生たちが講師となり、災害シミュレーションゲームや心肺蘇生・AEDの講習を行い、災害対応力を高めました。こうした将来の防災・減災につながる取り組みにも海外救援金が活用されています。



3.11における台湾の支援に感謝 岩手県から町長が台湾赤を訪問

東日本大震災では、台湾赤が集めた25億7778万4675台湾元(当時のレート換算で約70億円)の寄付が日本に贈られました。

それらは、東北の被災地の公共住宅、高齢者住宅、保育所、放課後施設、病院、地域福祉センターなど6つの復興支援プロジェクトに充てられ、中でも岩手県山田町においては、2つの保育園と2つの放課後施設の建設に役立てられました。また台湾赤の方々は何度も被災地を訪れ、被災者を励まし、地域住民との交流を深めました。同町の佐藤信逸町長は、この時の深い感謝を胸に今年1月に台湾を訪問。台湾赤の台風被害に対する活動を支援するため、100万円の寄付金を贈呈しました。

台湾赤と日赤の交流は、より一層深まっています。今年2月、日赤が開催したIMPACT*研修に、台湾赤スタッフを招待。この研修は赤十字の国際救援・開発協力の実践的知識・技術を修得する目的で開催され、台湾赤の参加者もさまざまな国の赤十字スタッフと能力を高め合い、赤十字の人道支援について意見交換を行いました。研修後、台湾赤のキャシー・リーさんは、「赤十字活動の全体像をより包括的に理解することができ、実りが大きかった。これまで以上に台湾での赤十字活動に貢献していきたい」と語りました。

日赤と台湾赤の支援事業は、この先も続いていきます。

*International Mobilization and Preparation for Action: 赤十字の国際救援・国際協力要員研修



1500個の食料ボックスを配布。困窮世帯に安らぎを届け農家や地域産業に新たな希望をもたらすことを目指す



EMT-1訓練では、外傷の包帯処置や止血方法、乳幼児への応急手当など、実践を通じてスキルを学んだ



台湾赤の人道教育センターが台北都市圏の災害対策拠点として重要な役割を担っているとの説明を受ける佐藤町長(写真中央)